国土交通省中部地方整備局木曽川上流河川事務所
揖斐川第二出張所

# 『水』に関わる地名の由来について【安八町編】

- 当管内の大垣市（おおがきし）、安八町（あんばちちょう）、輪之内町（わのうちちょう）は、西南濃地方に属し、昔から、美味しく綺麗な水が自然に地下から湧き出し、水と共に発展してきた地域です。しかし、その一方で地形的特徴から、「洪水常襲地域」とも言われ、常に洪水に見舞われ、水に苦しめられてきた地域でもあります。度々、洪水に襲われていた先祖の人々は、今から約400年前、洪水から生命と財産を守るため、周りの人々と共同して自分たちの家の周りに「輪中」と呼ばれる堤防を築きました。こうした歴史的背景を下に、今回、水に関わる地名のいわれを、書籍「水都大垣の地名」（大垣市地名研究会編著）や「安八町　歴史と地名をたずねて」（安八ニューリゾート検討委員会／編）、「ふるさと安八町」（安八町教育委員会編）などを参考として、幾つかの事例を紹介します。

出典：　安八町歴史民俗資料館の展示施設
きり絵（増田晴風氏 作）

## 【安八町（あんばちちょう）の地名由来】

- 安八町の「あんばち」は、もとは味蜂（あじはち）（あはちとも読む）でした。正倉院文書に、大宝２年（702）の御野味蜂間（みのあはちま）郡の戸籍が残っています。味蜂とは、味鴨（あじかも）が東アジアから飛んでくる様子で、味蜂間はその飛来する入り江です。

　この郡の南部は古代、味鴨が住む伊勢湾の入り海でした。和銅６年（713）の好字令で「あはち」に「安らぎ八つ」の好字をあてました。「日本書紀」の安八麿（あはちま）も「続日本記」の安八（あはち）も、その後に書かれたものです。やがてこの安八を「あんばち」と呼ぶようになりました。

江戸時代（1600年頃）の輪中とお囲堤

# 明治初期の輪中分布図

出典： 安八町歴史民俗資料館の展示施設

# 明治29年の大洪水

## ■大規模な浸水被害

- 今から約120年前、明治29年（1896）は、７月と9月に２度の大洪水が発生し、下表にあるとおり大規模な浸水被害が生じました。

明治29年の大洪水の様子　（大垣市立図書館提供）

明治２９年の洪水被害

| 項目＼地域＼月 | 岐阜県 | | 安八郡（当時） | |
|---|---|---|---|---|
| | 7月 | 9月 | 7月 | 9月 |
| 死　　者 | 49名 | 158名 | 6名 | 58名 |
| 流された家 | 919戸 | 3,738戸 | 54戸 | 2,391戸 |
| 壊された家 | 4,064戸 | 5,377戸 | 1,337戸 | 2,007戸 |
| 床上浸水 | 11,220戸 | 11,040戸 | 787戸 | 244戸 |

出典：岐阜県治水史より

※当時の安八郡は、今の大垣市の大部分と安八郡を合わせた地域

## ■堤防の切所

- 結輪中では、犀川の水が溢れ、町屋の輪中堤が切れました。
右の写真は堤が切れてから１週間後におよそ４m減水した時の様子です。
- 大明神輪中では、今の一宮線の北あたりの郷倉の建っていた所の堤防が切れました。その切れる前には、溢れた水が堤防を越えたり、その郷倉の下から水が噴き出したため、村の人たちが杭打ちや土俵積みなど必死の水防活動を行いました。
- また、中村輪中でも、中村川が長良川と揖斐川の水が合流して水が溢れ、切所にはおよそ３反（３ヘクタール）の大きな池が出来ました。

町屋（西結）の切所の様子（大垣市立図書館提供）

## ■避難生活のようす

- 多くの人々は、堤防沿いの二階のある家に避難し、堤防には、右の写真のような簡単な小屋を建てました。水屋のある家や特に高い土地に住んでいる人は、他へは避難はしませんでした。
- 避難場所へは、水を入れた桶や瓶、大麦をいったこがし、味噌やたまり、コンロや鍋、着物などを運びました。また、タンスなどを水屋に預ける人もありました。
- また、水深が深く歩行が出来ない場合は、舟や筏で行き来をしました。

堤防上の避難小屋　（大垣市立図書館提供）

## ■結地区　～　時を結び・縁を結び・人を結ぶ　～

- 結（むすぶ）の地名は、千年ほど前の創建された結神社からきています。結神社の祭神は、高皇産霊（たかみむすび）や神皇産霊（かみむすび）など造化の神で、万物を産み出す縁結び（産霊（むすび））の神です。縁結びの神が鎮座する結村は、揖斐川の対岸と結ぶ渡しのある港町、渡津でした。古くから街道集落として賑わい、縁結びの役を果たしてきました。

結神社

安八町（結地区）位置図

- 江崎（えさき）は、樽見鉄道北からＪＲ東海道線南にまたがる揖斐川左岸沿いの細長い地域です。江崎の「江」は、用排水路など掘って造った江川・溝をさす場合が多く、用水路の先端（江の先端・突端）と言うことから名付けられたと考えられます。

- 「良」「ら」は、浦（裏）、隣り、村、側という語意があります。外良は、外浦、外面、外村とも同義のものです。東外良は、結神社の東浦に位置し、結輪中堤の最北端の通称「淀堤」の東堤外地でもあることから、東外良（ひがしそとら）が名付けられたと考えられます。

- 西沖（にしおき）・東沖（ひがしおき）は、結輪中の最南端に位置し、「沖」とは遠く離れて堀のように水が溜まっているところから名付けられたと考えられます。

- 「河原」には、「川沿いの平地」とか、「河川敷」の意味があります。洪水のたびに水がつく遊水地となり、自然形状によって付けられたのが下河原（しもがわら）と考えられます。

- 角田（すみた）は、輪中堤の隅、角で奥まった所からということで名付けられ、隅田が転じて角田になったと考えらます。また、角田には、明治３０年代に揖斐川から直接取水する樋管が完成。この樋管は、日露戦争で二〇三高地が日本軍によって陥落した時に築造されたもので、祝意を表し「二〇三閘門」と呼称していました。

二〇三閘門からの中須川用水樋管（角田）

- 昔の旧河道で、伏流水が湧き出たことから清水（しみず）が名付けられたと考えられます。

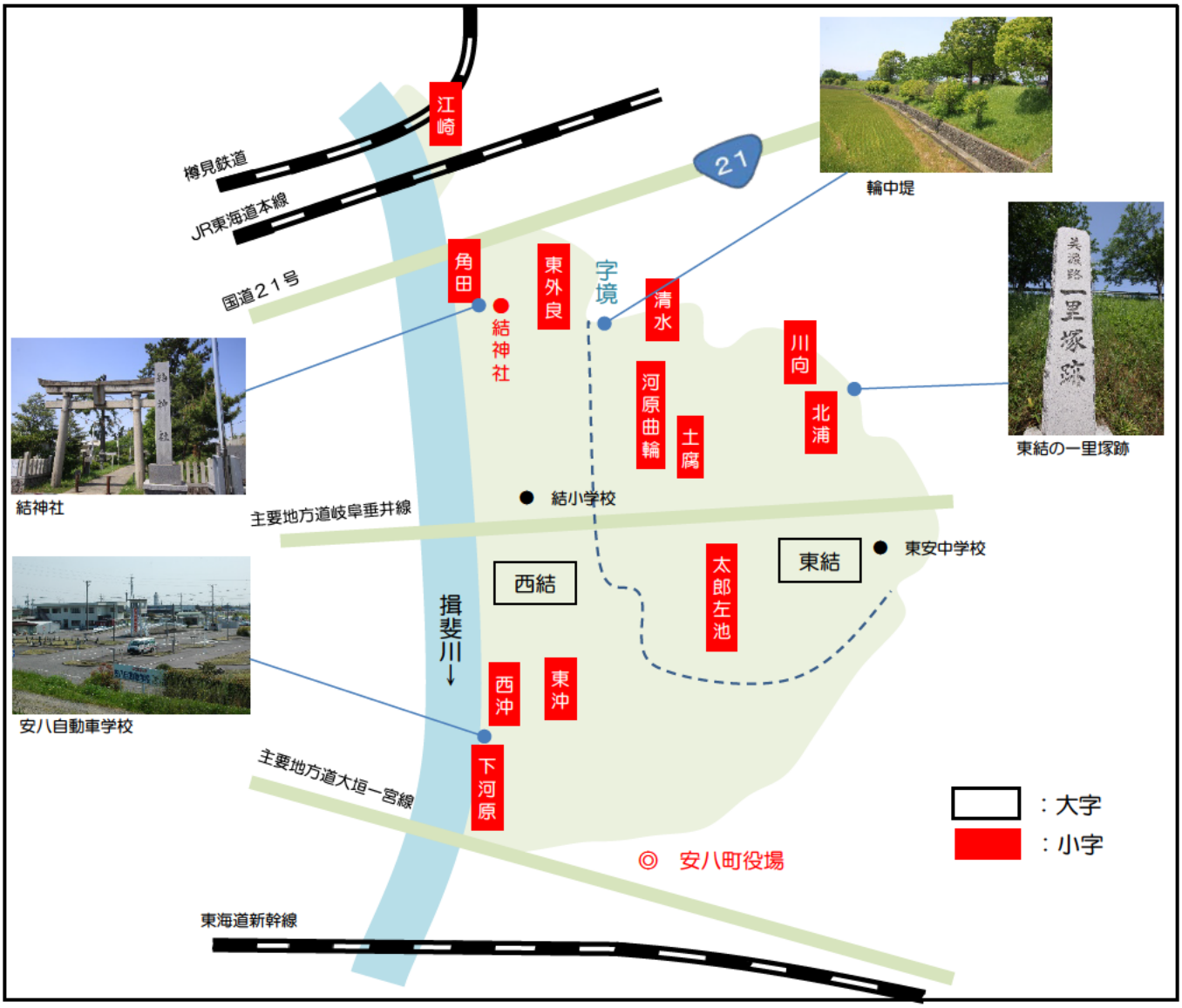
- 「曲輪」とは集落と耕地を保護する囲い堤のことです。河原曲輪（かわらくるわ）は、洪水により破堤し土砂が沖積し河原のようになったところを囲んだところから名付けられたと考えられます。

- 昔、水濠地でドブ田だったところから、土腐（どぶ）が名付けられたと考えられます。

- 川向（かわふごう）は、昔の旧河道で墨俣の「城の越」で長良川に注いでいたため、低地で原野・池沼が多くありました。村から見て川の正面、川のむこうと言うことから名付けられたと考えられます。

- 「浦」には入江・裏・畑などの意味が含まれています。村ノ内の集落の北の畑に入り組んだ低い浦のような所に位置していたことから、北浦（きたうら）が名付けられたと考えられます。

- 低地で周囲４０mの池がありました。太郎左と言う人物にちなんで太郎左池（たろうざいけ）が名付けられたと考えられます。



## ■名森地区　　～　「名森」の地名を生んだ名木林神社　～

- 明治の頃、氷取、大明神、南今ヶ渕、北今ヶ渕、森部、大森、南条、中須、善光、大野、中村の１１ヵ村が合併した時、どこの村人も納得できる地名が必要でした。幸い、１１ヵ村の総社である名木林神社の「木」と「林」を組み合わせて「森」と読み、名森（なもり）の地名を作りました。

名木林神社

安八町（名森地区）位置図

- 享禄３年（１５３０）の大洪水で、中須川ができた特に、渕が生まれのち渕の南が南今ケ渕（みなみいまがふち）、北が北今ケ渕（きたいまがふち）となったと思われます。

- 青刈（あおがり）は、揖斐川堤防左岸に接しています。昔、この地の稲の穂が水面から出ていて、まだ少々青いうちに刈り取らなければ収穫できないことから名付けられたと伝えられています。

- 中須川流域にあって、原野という意味で名付けられたのが河原（かわら）、沼が多くあることから名付けられたのが東沼（ひがしぬま）、昔、池があり埋められて耕地整理後に、二村東北部を新しく荒池（あらいけ）と名付けました。また、中須川に浮かぶ島のように見えたところから、北島（きたじま）が名付けられたようです。

- 「蛇」には崩れる意味があり、中須川の氾濫で堀あけられたところが、蛇池（じゃいけ）の由来と考えられます。

- 旧森部村の最南端薬師のすぐ北に位置し、南に開けた原野ということで、下河原（しもがわら）と名付けられたと考えられます。また、森部全体の中でもっとも低湿地で、悪水路が幾筋もあり、堀田を作ったために出来た堀つずれ（沼）があったところが、北沼（きたぬま）、西沼（にしぬま）、南沼（みなみぬま）と名付けられました。

- 堤防が大出水のために切れて、川から大量の砂が流れ込み、良田も砂がかぶり住民が苦しむことがありました。これを「砂入り」とか「砂押し」と言い、島状の堆積地が形成されたところが砂入（すないれ）となったと考えられています。

- 長良川沿い（現在は犀川沿い）にあって、筏の発着地点だったところが、筏場（いかだば）の由来となっています。

- 兀沼（はげぬま）の「兀」はコツ、ゴツと読み、高く突き出た立ったさま（兀然）、山に草木のないさまの意で、また「ハケ」は低い窪地、不毛地の方言とも言われています。また、押口（おしぐち）は、押し出された地形を言い、この地は中須川に沿って南へ突き出ているところです。

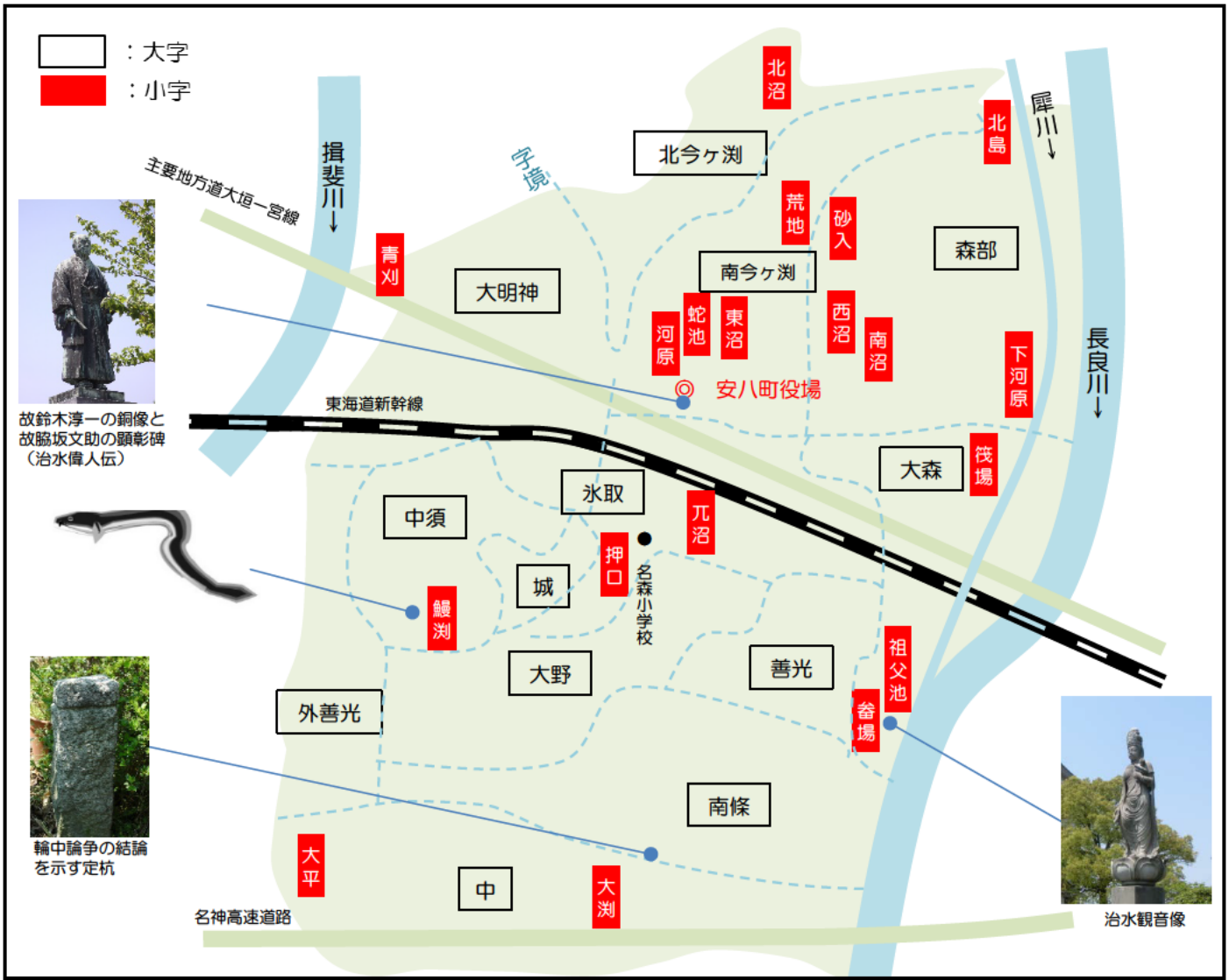
- 幅約７mの江川が流れ、水が深く静まり返って渕のようになっていたことから、大渕（おおぶち）と名付けられたと考えられます。また、出水すると一面が平ったい水面になる平らな土地から、大平（おおひら）が名付けられたと考えられます。

- 「畚」は土を運ぶむしろで造った「モッコ」のことです。「モッコ」を使って埋立てた場所が畚場（ふごうば）になったと考えられます。

- 「そぶ」は、赤茶けた鉄分の水のことで、鉄分のにじみが見られる池があったことが、祖父池（そぶいけ）の由来であると考えられます。

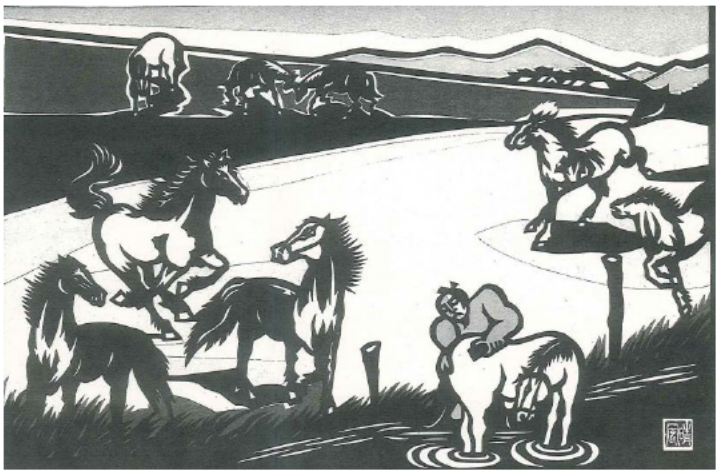
- 鰻渕（うなぎぶち）は、中須川沿いの池で、大きなウナギがたくさん取れた渕があったことから、鰻の渕（川）と名付けられたと考えられます。

畚（モッコ）



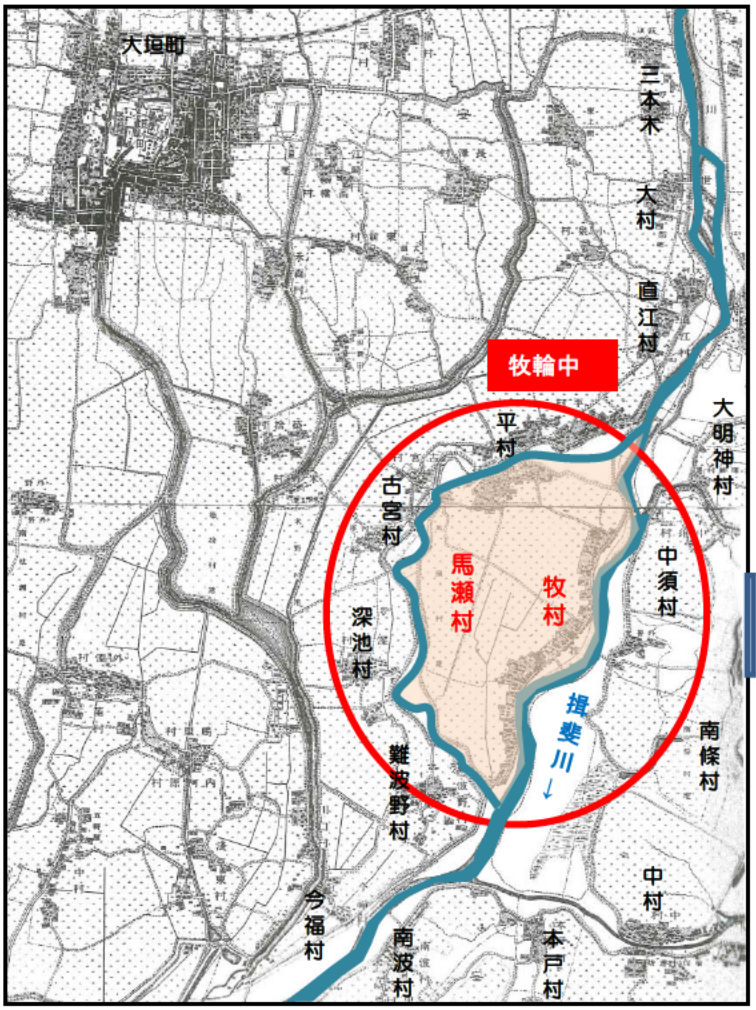
## ■牧地区　～　良馬を献上した牧地　～

- 牧（まき）は、古く「馬置（まき）」と記され、馬を置く所でした。かつて隣の馬之瀬（現在の大垣市馬瀬町）とともに揖斐川の中洲にあって、牧輪中をつくっていました。馬之瀬は、牧村の枝郷（分村）で、馬洗いの川の瀬から生まれた地名です。「牧村史」によれば、源義経（1159～1189）に良馬を献上した縁で、牧郷の地名を与えられたと伝えられています。



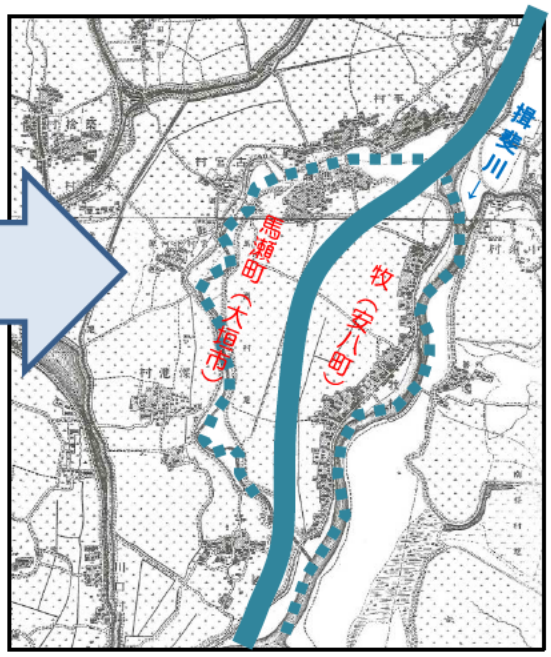
出典：　書籍「西美濃おもしろ地名考」より引用
　　きり絵（増田晴風氏 作）

安八町（牧地区）位置図




明治24年の河川流路図

オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケのもと、明治20年から明治45年に行われた三川分流工事（明治改修）によって、揖斐川の流路が現在の位置に付け替えられました。その結果、後に「牧村」は安八町、「馬瀬町」は大垣市に編入されました。




現在の河川流路図

- 附砂（つきす）は、もとは砂入（すないり）と言われていました。「附」には土山の意味があり、砂で出来た山、つまり中洲のことです。昔の中須川は、この辺りから揖斐川に注いでいました。
- 石土手（いしどて）の土手とは堤防、岸のことであり、堤の補強に石土手を築いたこと、また、池に菱が繁茂することから名付けられたのが菱池（ひしいけ）と考えられます。
- 打出は、川口で水を川へ打ち出すことです。悪水の落ちる江川があったことから、堤内打出（つつみうちだし）と名付けられたと考えられます。また、池や沼が多く、魚を主食とする鴈などの鳥がよく住んでいたことから、鴈ケ脇（がんがわき）と名付けられました。
- 忠三と言う土地の有力者が、自分の土地に渡し場を造ったことから、忠三河渡（ちゅうざごうど）と名付けられたと言われています。
- 猿尾（さるお）は蛇籠とも言い、竹籠に石を詰めたものです。川の中に突堤のように積み、川の流れを緩めたり、堤防を補強したりするために用いられました。旧揖斐川の水勢を弱めるために猿尾堤があったところとみられます。
- 久保山（くぼやま）の「クボ」には低く窪んだ所の意があり、「ヤマ」には耕地の意があります。低湿地を耕地にしていたことによるものと思われます。

# 水のまちの歴史を伝える大字・小字

- 安八町は、稲の豊穣をもたらす水の恩恵を受けた反面、度重なる水禍に悩まされてきました。このため、屋敷をより高く築き、北や西に槇の木や竹を植え、万一の洪水時の宅地の流出や、流木による家屋の損壊を防護する屋敷林としてきました。これは、冬季の伊吹おろしの防風林ともなってきました。先人が教えた生活の知恵が今も受け継がれています。

半兵衛屋敷の集落を望む（高い石垣と屋敷林）　平成26年4月26日撮影

【出張所コメント】

- 今回、安八町の地名由来を整理して感じた事として、洪水の影響で土砂が堆積や流出、それに川筋の様子を伺わせるなど、「水」との関わりを表している所が非常に多く、まさしく「水郷の地」であることを再認識しました。普段、何気なく使われている地名には、それぞれに依拠した根拠や理由があり、その時代に生きた人たちの息づかいを感じます。こうした歴史の背景に触れ、地域の地名を知ることは、現代・未来を考える道標（みちしるべ）になるものと思います。

S51.9.12 長良川水害